

## 2. 古墳時代前期の土器群について

第VI章で既に述べたように、古墳時代前期については竪穴住居跡17軒を検出した。住居跡の遺存状態は良好でなく、遺物量も全体としては少ないが、いくつかの住居跡で比較的まとまって土器が出土している。ここでは、それら土器群の様相をまとめておきたい。

なお、検出した住居跡には、近接するものや主軸を違えるものが存在し、古墳時代前期の集落は2時期以上に亘って形成された可能性が考えられる。

### 1. 住居跡出土土器群の検討

住居跡出土の土器群については、全体として見た場合には、従来言うところの古墳時代前期五領III・IV式～和泉I式の幅にはほぼ収まるものである。

しかしながら、住居跡単位で見た場合、五領式末的様相と和泉I式的様相は混在し、明瞭に五領III式・IV式・和泉I式の土器群と断定できるものは少ない。

以下、主要な住居跡の出土土器群を見てみる。

**第27号住（第87図）：**炉・床面出土の刷毛目を残す台付甕3・甌4、丁寧な範磨きを施す高坏5・6・7は五領式的様相を示す。高坏5・6は、口縁が直線的あるいは内彎気味に開く丸底鉢に「八」字状の脚が付加された器形を持ち、本庄市諏訪遺跡第29号方形周溝墓出土例をはじめ、五領式期後半にいくつかの類例が存在する。また、高坏6の坏部は児玉町後張遺跡第74住

（後張II期）の丸底鉢に近い。深身の坏部を持つ高坏7には柱状脚が付く可能性があり、その場合、大宮市下加南遺跡4・7号住の高坏に近い器形となろう。小形器台2と甕1は覆土出土である。甕1の直線的で幅広の口縁は、伊奈町大山遺跡A区第18号住や大宮市下手遺跡B区第6住の台付甕に近似する。

**第13号住（第77図）：**炉・床面出土の丁寧な範磨きを施す下膨れの壺2・刷毛目を残す甕5・6・鉢13・小形器台16は五領式的様相を示す。

覆土出土では、中実円筒をくり抜いた柱状脚の高坏14・和泉I式の高坏15・和泉式的様相を示す甕7・鉢

8・9がある。

**第45号住（第98図）：**炉・床面出土の丁寧な範磨きを施す畿内的な直口壺1・刷毛目の上から粗い範磨きを施す壺2は五領式的様相を示す。

**第44号住（第95図）：**いずれの土器もほぼ床面出土である。高坏10は中実円筒をくり抜いた長い柱状部を持ち、大山遺跡A区第18号住の高坏に近い。複合口縁壺1は同A区第33号住に、高坏7は同G区第1号住に近似する例が存在する。

複合口縁壺2・範削りの小形掛3・鉢4・高坏6・9・12のセットは和泉I式の範疇と考えられる。高坏8の短く膨らむ柱状部は和泉II式的である。

**第48号住（第104図）：**壺2・高坏8が貯蔵穴、有段の高坏10を含めて他はほぼ床面出土である。刷毛目を残す甕4を除いて、ほぼ和泉式的様相を示す。

**第14号住（第80図）：**ほぼ床面出土の直口壺1・壺2・高坏4・5・9・12は、ほぼ和泉式的様相を示す。中実円筒をくり抜いた柱状脚の高坏7を含め、他は覆土出土である。

**第19号住（第84図）：**貯蔵穴内出土の複合口縁壺1・高坏3、床面出土の複合口縁壺2は和泉I式である。

以上を含め、本遺跡の古墳時代前期の住居跡出土土器群には、ほぼ次の3相が存在する。

**A相：**ほぼ五領III・IV式的様相

(13住・27住・41住・42住・45住・50住)

**B相：**五領式末的様相と和泉式的様相の混在

(44住・46住・48住)

**C相：**ほぼ和泉I式的様相

(14住・19住・28住・47住)

A・B・C 3相と住居跡の主軸方向との関係を見ると、ほぼ北を向くグループがA 5軒・C 1軒、やや東に振れるグループがA 1軒・B 3軒・C 3軒と若干の相関性を感じられるが、必ずしも全ては一致しない。さて、上記3相の示すものがそのまま集落における時期差であるのか否かは問題となろうが、後述する理由

もあり、検討の不十分な現段階で結論を急ぐことは差し控えることにして、以下、今後に備える意味で、本遺跡土器群と近縁性を持つと思われる五領式期末の土器群の一様相について少し触れておきたい。

## 2. 五領式期末の土器群の一様相

筆者はかつて、日本考古学協会新潟大会シンポジウムの成果および先学の業績を基礎に、大宮台地の弥生時代末～古墳時代前期前半（五領式期）の土器様相の変化についての概ね三段階の段階設定を試みた。

第3段階については、柱状脚部高坏の参入に象徴される段階とし、東海系土器群の影響が薄れ、畿内布留式系土器様式にはほぼ収束すると考えた。

第3段階の代表的な土器群としては、大宮市下加南第4号住及び第7号住、桶川市宮前遺跡2次第1号住、伊奈町大山遺跡A区第18号住出土土器群などを挙げた。

これらの土器群の組成において最も注目されるのは、本屋敷系高坏とも和泉式高坏とも異なる、特異な柱状脚高坏の存在である。本遺跡第44号住の高坏10も同類の高坏である可能性が高い。

「下加南型高坏」：ここで「下加南型高坏」と仮称する高坏は、直線的に開く深身の坏部、中実円筒の内部をくり抜いた肉厚の長い柱状部、屈曲して開く円錐台形の裾部を特徴とする。小さい口径に比較して器高が高い、やや不安定な器形を持つ高坏である。

同類の高坏は、県内では上記以外にも、熊谷市北島遺跡12地点第2号住、嵐山町白草遺跡第3号住・第15号住、児玉町後張遺跡第166号住居跡、草加市蜻蛉遺跡第18号土壙・第18号溝などに見られる。

また、県外では千葉県市原市土字遺跡第66住、群馬県伊勢崎市天ヶ堀遺跡第7号住、栃木県宇都宮市花の木町遺跡第9号住、茨城県那珂湊市山崎遺跡第32号住、及び東北地方南部などに存在し、更に類似するものを求めると、分布圏は新潟県、東海地方西部など東日本一帯に拡大する。

同類の高坏が東日本各地域に出現する時期は、概ね、

畿内編年の布留式中段階、東海地方西部編年の廻間III式4段階～松河戸I式前半、北陸地方南西部編年の漆9群～10群段階の併行期と思われる。各地域とも基本的に小形器台と小形丸底土器群を伴うが、範磨きを省略し、体部に範削り痕を残すものが多い。

「下加南型高坏」には、東北地方南部や北関東地方に多く見られる中実柱状脚高坏と関連性が伺われるが、出自については不明確である。

なお、五領式期末には、「下加南型高坏」の他に、後述の北島遺跡12地点第2号住や後張遺跡第179号住に見る高坏も併存すると考える。後者は和泉式高坏の先駆とも言うべき形態を持つが、「下加南型高坏」は特異かつ短命であり、和泉式高坏の成立に直接の影響を与えたとは思われない。

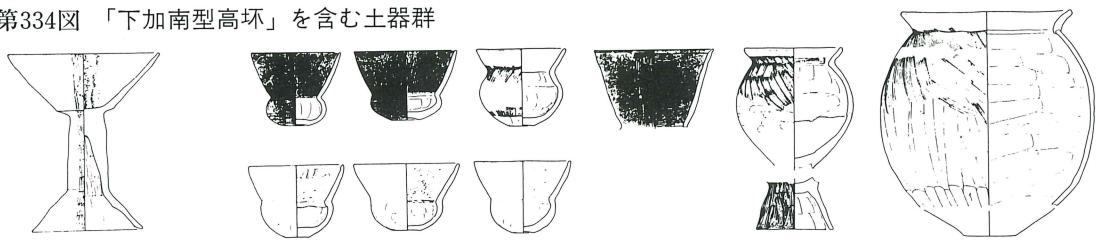
さて、県内の主な資料に戻り、「下加南型高坏」を含む土器群の様相を見てみたい。

**下加南遺跡第4住：**「下加南型高坏」と小形埴・甕が出土している。小形埴は、範磨きを施して赤彩するものと体部を範削りするものが共伴する。土字遺跡第66号住で「下加南型高坏」やX形小形器台に伴う小形埴とほぼ同形も見られ布留2式段階のものに近い。甕は体部上半に刷毛目を残し、下半は範削りを施す。

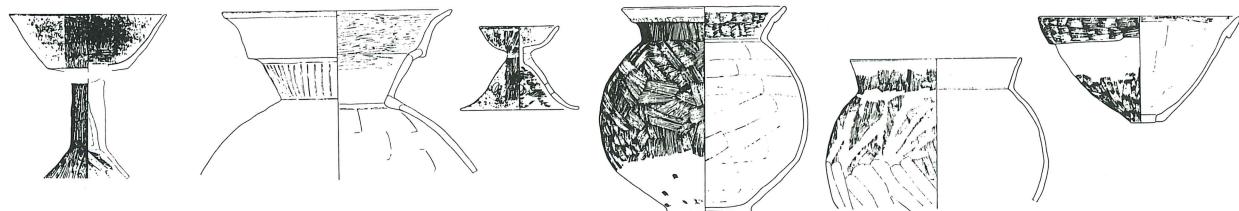
**下加南遺跡第7号住：**「下加南型高坏」と小形器台・二重口縁壺・甕・甌が出土している。小形器台は、本遺跡第13号住例と同様に内彎する器受部と「八」字状の脚部を持つもので、丁寧な範磨きが施され赤彩される。二重口縁壺の口縁はあまり開かず二重部分は幅広で、後張遺跡第177・179住・蜻蛉遺跡第18号土壙例に近い。幅広で直線的な口縁部を持つ甕は、本遺跡第27号住・大山遺跡A区第18号住・下手遺跡B区第6号住などに見られる甕と共通する。甕の器面調整は、体部上半に刷毛目を残し、下半は範削りを施す。複合口縁で円錐形の甌は五領式～和泉式に継続する形態で、本遺跡第13住・第46住にも近いものが存在する。

**大山遺跡A区第18号住：**「下加南型高坏」と埴・複合口縁壺・甕・台付甕などが出土している。埴は「下

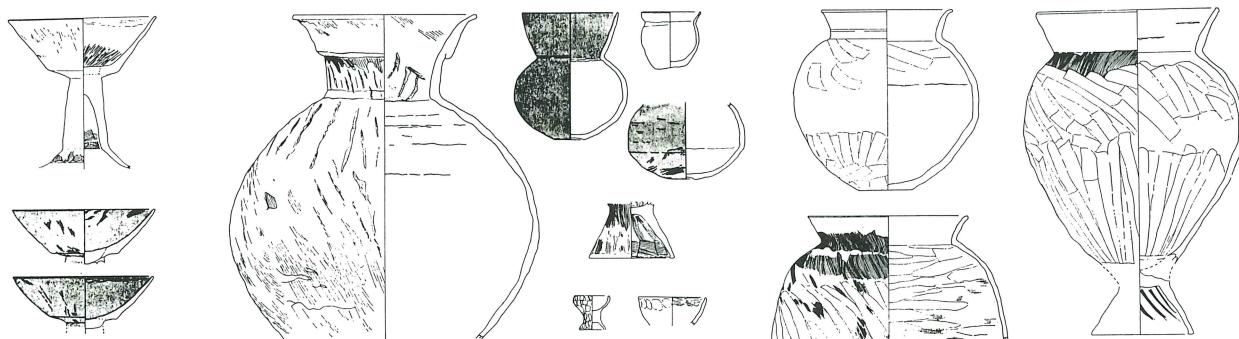
第334図 「下加南型高坏」を含む土器群



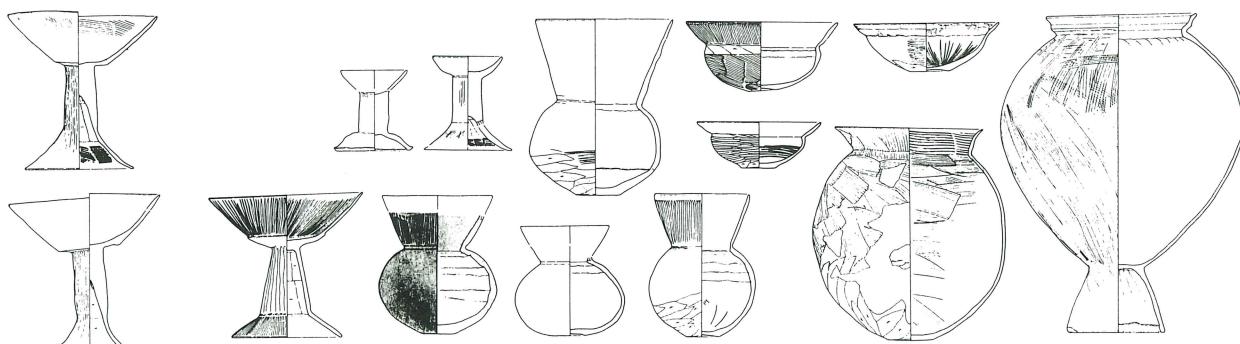
大宮市下加南遺跡第4号住



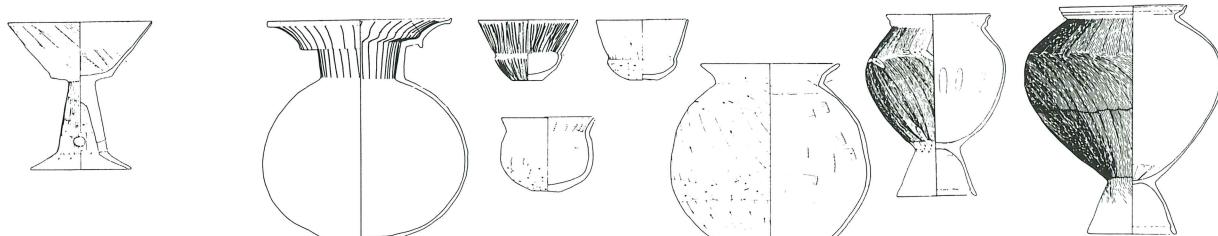
大宮市下加南遺跡第7号住



伊奈町大山遺跡A区第18号住



熊谷市北島遺跡第12地点第2号住



児玉町後張遺跡第166号住

0 10cm

「加南型高坏」を持つ宮前遺跡2次第1号住・蜻蛉遺跡第18号土壙・北島遺跡12地点第2号住の埴と同形だが、宮前例・蜻蛉例には範磨きが施されない。また、宮前例・北島例には小形器台が伴う。複合口縁壺は外観的に見れば、下加南遺跡第7号住・後張遺跡第177・179号住・蜻蛉遺跡第18号土壙例などの二重口縁壺に近い。台付壺の直線的な幅広の口縁、上部に最大径を持つ無花果形の体部、体上部に僅かに刷毛目を残し、以下を範削りする器面調整は、大宮市下手遺跡B区第6号住のものに極めて近似する。

**北島遺跡12地点第2号住**：「下加南型高坏」と布留2式的な高坏・小形器台・埴・丸底鉢・壺・S字口縁台付壺が出土している。布留2式的な高坏は、「下加南型高坏」に比較して和泉式高坏に近い器形を持つ。小形器台は中実柱状脚部を持ち、福島県樋渡台畠遺跡、山形県下槻遺跡など東北地方南部で中実柱状脚高坏と共に伴するものに酷似する。埴は範磨きを施すものと体部下半に範削りを残すものが共存する。丸底鉢は浅く、口縁部は屈曲して直線的に開く。壺は体部上半に刷毛目を残し、下半は範削りを施す。S字口縁台付壺は、S字が伸び、肩部の横刷毛目を部分的にのみ残す新しい様相を示す。

**後張遺跡第166号住**：「下加南型高坏」と二重口縁壺・小形埴・鉢・壺・S字口縁台付壺が出土している。小形埴は、ほぼ同形で範磨きを施すもの、範削りを残すものの両者が共存する。S字口縁台付壺は、S字が伸び、肩部の横刷毛目を省略する新しい様相を持つ。

なお、同様に「後張I期」の第168号住出土土器群には小形器台が含まれる。

**後張遺跡第177号住**：「下加南型高坏」と中実柱状脚高坏・小形器台・二重口縁壺・複合口縁壺・埴・小形埴・小形丸底鉢・壺・S字口縁台付壺が出土している。高坏には坏部下端に明瞭な段を持つ和泉式的なものが含まれる。小形器台は「後張I期」と同様である。二重口縁壺は、同遺跡第179号住や下加南遺跡第7住・蜻蛉遺跡第18号土壙に近いものが存在する。小形埴は、下加南遺跡第4住や土宇遺跡第66号住と同形のもの

を含む。S字口縁台付壺は、S字が伸び、肩部の横刷毛目を省略する新しい様相である。

なお、同様に「後張II期」の第179号住出土土器群には、北島遺跡12地点第2号住例とは若干異なるが、和泉式高坏の先駆的な高坏が見られる。同住居跡では小形器台や脚部内面に粘土帶積上げ痕を残す和泉式的様相の高坏が出土している。

「下加南型高坏」を鍵として、県内の遺跡における五領式期末の土器群の様相を見てきた。

以上の土器群について言えば、A区第18号住を含む大山遺跡の土器群は、小形器台の欠落などにより、報告の際には和泉式期最古段階とされている。また、横川好富氏は、下加南遺跡第4号住・第7号住を五領III式、大山遺跡A区第18号住を五領IV式とした。更に、立石盛詞氏は、後張遺跡の五領式期末を第166号・第168号住を含む後張I期と、第177号・第179号住を含む後張II期に分けている。

五領式期末～和泉I式期の土器の変化を概観した場合に、「八」字脚の高坏→柱状脚部高坏→和泉式高坏、小形器台の稀薄化→消滅、壺・埴の範磨き省略化と範削り残存、台付壺→平底壺、壺などの刷毛目残存→範ナデ・範削り、S字口縁台付壺の退化、等々の大きな流れはほぼ確認されていることである。

しかしながら、本遺跡例を含めて地域や遺跡個々では、新旧の様相の混在など該期の土器変化が必ずしもそう単純でないことも見てきたとおりである。すなわち、例えば、ある遺跡・住居跡の土器群に、古相もしくは新相がより多く見られること、特定の器種・要素を含むこと、あるいは欠落することを、早急に古・新という時期差に解釈して縦に列べてしまうことには、かなりの危険性が伴うと思われる。

かつて、弥生時代末～五領式期の土器変化の検討を行った際に、外来系土器様相を「比較的早く多く受容する遺跡」「特定の器種・要素のみを部分的に受容しつつ、前代から続く土器様相を長く保持する遺跡」がほぼ同時期に併存する複雑な状況が想定された。また、こうした受容の違いは、遺跡の地理的環境、自然的環

境、前代からの歴史的環境、遺跡の性格などに起因し、大宮台地元荒川流域・県北児玉地域など地域単位、場合によっては五領遺跡・下道添遺跡などといった遺跡単位で異なるものと考えられた。

同様に外来系土器様相の関わる部分が大きいと思われる五領式期末～和泉I式期の土器変化にも、類似した状況が考えられよう。県内で、この時期、盛んに古

墳が築造される地域と、されない地域が存在することもそうした状況の存在を明示するものかもしれない。したがって、該期の土器変化の様相については、広域における動向・画期も視野に入れつつ、五領III式・IV式・和泉I式など既存の枠を一旦取り去った上での再検討を地域毎に行う必要があると思われる。

#### <引用・参考文献>

- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書10  
1994『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書48
- 今泉泰之 1979『古墳時代』『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書23
- 大谷 徹 1991『北島遺跡III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書103
- 書上元博 1994『稻荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書139
- 後藤信祐 1992『宇都宮市花の木町遺跡出土土器の再検討』『研究紀要』1 栃木県文化振興事業団
- 埼玉県 1982『新編埼玉県史 資料編2 原始・古代』
- 笛森紀己子ほか1986『吉野原遺跡・下加南遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊3
- 田嶋明人 1986『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
- 立石盛詞 1983『土器について』『後張 本文編II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書26  
1987『女堀II遺跡発見の土壤と二・三の問題について』『女堀II・東女堀原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書68
- 千曲川水系古代文化研究所ほか1984『三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』
- 寺沢 薫 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49
- 日本考古学協会編 1988『シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題』
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会編1993『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
- 村山好文ほか1979『土字』日本文化財研究所
- 横川好富 1982『埼玉県の古式土師器』『埼玉県史研究』10